

自由21

サル胆管炎および肝切除モデルにおける組織因子の発現機序の解析

日暮愛一郎、轟木秀一、岡本好司、伊藤英明
(産業医大・第一外科)

「目的」我々は好中球の新しい機能として、炎症局所における好中球のTissue Factor (TF) 発現と凝血病態との関連に注目している。今回、LPS投与による実験的炎症反応を惹起し、サル好中球でのTF発現とその凝固活性化への関与について検討した。

「方法」ニホンザル6頭を用い、LPS静注投与群、LPS総胆管投与群およびコントロールとした（肝切除モデルについては今回検討していない）。LPS投与後経時的に末梢血を採血し、凝固・線溶マーカーおよびTF抗原量を測定した。特に、総胆管投与群については肝静脈血も同時に採血し、末梢血のマーカーと比較した。更に、LPS投与3時間後に肝、肺、腎を採取し、好中球の集積度やTF発現性を光顕あるいは電顕レベルで免疫染色により解析した。

「結果・考察」1) LPS静注群においては肝ならびに肺の微小血管に多数の好中球が集積し、これらの好中球は免疫染色でTF陽性を示した。総胆管投与群ではTF陽性好中球の集積は肝のみに見られ、肺や腎では認められなかった。免疫電顕では好中球の細胞内小胞にTFのシグナルが観察され、好中球内でTF生成が確認された。更に、これらのTF陽性好中球の周辺にはフィブリン生成が認められ、血中TATは著明に上昇した。従って、サルモデルにおいても炎症局所で好中球の集積とTF発現が見られ、この好中球TFが炎症反応における凝固反応活性化の主要因で有ることが示された。

自由22

発癌に差異が観察される日・米ワタボウシタマリンの分子細胞生物学的研究

保富康宏（三重大・医・生体防御）、宮澤正顕（近畿大・医・免疫）、栗林景容（三重大・医・生体防御）

ワタボウシタマリンは米国においては非常に高頻度に潰瘍性大腸炎を引き起こし死に至り、それを免れたものもその後大腸癌を発症することがよく知られている。これらのことから大腸炎、大腸癌の研究に最も良いモデルではないかと考えられ様々な手法により研究がされている。今回我々は京都大学霊長類研究所にて過去死亡したワタボウシタマリンのホルマリン固定標本を大腸を中心に検索した。検索したいずれの材料からも大腸癌を思わせる所見は見いだせなかった。また観察記録からも出血性の下痢などは過去に観察されておらず明らかに米国におけるワタボウシタマリンとは異なった経過をたどっていた。米国のワタボウシタマリンの主要組織適合抗原複合体（MHC）クラス I は非常に特徴的であり原始的な型を持つことが知られており、これが病態に関与しているのではないかと考えられていることから現在我が国のワタボウシタマリンのMHCクラスIを検討中である。